地域づくり表彰

NPO 法人俳句甲子園実行委員会（愛媛県松山市）

いで湯と城と文学のまち松山が舞台 俳句甲子園　～高校生にしか語れない俳句がある～

NPO 法人俳句甲子園
実行委員会

第 19 回大会実行委員長

日野（ひの）　裕士（ゆうじ）

１．松山市の概要

松山市は愛媛県の中央部に位置する、人口約 51 万人の中核市です。市街地は 1,000 メートル級の山岳に囲まれ、島しょ部は瀬戸内海国立公園に指定されるなど、風光明媚で温暖な気候のまちです。

１－１．いで湯のまち

道後温泉は約 3,000 年の歴史を誇る日本最古の温泉といわれ、古くから多くの文人墨客が訪れ、万葉集にも詠まれました。道後温泉本館は明治 27 年に改築され、120 年以上を経た現在も改築当時の姿を留め、多く

道後温泉本館

の入浴客で賑わっています。平成 6 年に公衆浴場として初めて国の重要文化財の指定を受け、平成 21 年にはミシュラン・グリーンガイド・ジャポンの三ツ星の評価を受けています。

１－２．城のまち

市中心部の小高い山の上に建つ松山城は、加藤嘉明が 1602 年から築城

松山城天守

を開始し、完成までに四半世紀を要した四国屈指の城郭です。全国で 12 城しかない江戸時代以前に建造された「現存 12 天守」の一つでもあります。裾野の二之丸は史跡庭園として整備され、三之丸（堀之内）は憩いの公園になっており、週末には多くのイベントが開催されるなど市民に愛される場所です。

１－３．文学のまち

松山市は、正岡子規をはじめ高浜虚子、河東碧梧桐など多くの俳人を

正岡子規・夏目漱石

輩出したほか、夏目漱石の小説「坊っちゃん」や、司馬遼太郎の「坂の上の雲」の舞台になるなど、文化的土壌の豊かな街です。

松山市では近世から階層を問わずあらゆる分野の人々が俳諧に親しんできました。中世には神仏に捧げる法楽連歌が多く残されており、明治以降には正岡子規をはじめ多くの俳人を輩出した伝統風土があります。この松山市で、全国から高校生が集まる俳句甲子園を開催することは、本来「座」に集う人々の共同体であった俳句に相応しく、俳句文化の根付いた地域の特性を最大限に活用しています。

２．活動開始の背景・経緯

「俳句甲子園」という言葉は平成 6 年に生まれましたが、大会開催までには 2 度の苦難を乗り越えなければなりませんでした。

きっかけは、「高知県のまんが甲子園のようなものを愛媛県でもできないか」との発案でした。財団での事業化が企画されましたが予算の壁に阻まれます。平成 7 年には、月刊俳句新聞「子規新報」創刊記念の集いで俳句甲子園構想が発表されました。その後、開催趣旨や大会の運営方法、ルールなど現在まで引き継がれる骨格が作られましたが、全国から高校生を集める予算がつかず大会開催には至りませんでした。

そして平成 10 年、松山大学学長が、松山青年会議所を「子規新報」編集委員の夏井いつき氏に紹介したことから、大会は再び動き始めます。「子規新報」による企画をもとに、松山青年会議所が運営を担い、ついに「第 1 回俳句甲子園まつやま大会」の開催にこぎつけました。

３．ねらい・目的

俳句甲子園は、多くの俳人を輩出した松山の地で若い世代が俳句に慣れ親しむ環境を作りたい、俳句は難しいというイメージを取り払って松山から全国に発信できる文化事業としたいという思いから生まれました。

高校生の交流を目的に

各地から俳句に親しむ高校生が一堂に参集し、俳句を楽しみ、交流するこの大会は、高校生にとって国語教育の一環としてのみならず、俳句という文学を介して日本語を操る能力の向上、将来的な日本俳句文学の興隆、高校生相互の文化的交流、異世代との社会的交流を深め、豊かな人間性を育み、若者の文化活動の活性化に寄与することを目的としています。

４．大会の概要

高校生 5 人 1 組のチームで参加し、俳句の作句力と互いの質疑応答により俳句の鑑賞力を競います。試合は赤白に分かれ対戦します。各チーム

1 句ずつ披露し、それぞれ制限時間内に質疑応答を行います。双方の句

5人1組のチーム戦

の議論が終了すると、複数の審査員が旗を揚げ勝敗を決します。

平成10年の第1回大会では愛媛県のみ9校9チームのエントリーでしたが、平成28年の第19回大会には過去最多となる34都道府県102校137チームがエントリーしました。全国23都市28会場で地方大会が行われ、全国大会には34校36チームが出場しました。

5．商店街が大会の聖地に

全国大会は地元商店街「大街道（おおかいどう）」を舞台に行われます。中心市街地を南北に貫く約500メー

商店街を埋める観客

トルのアーケード商店街に、12の試合会場がずらりと並び、高校生たちの質疑応答の声が響き渡ります。平成13年から商店街での開催を開始し、現在では松山の夏の風物詩になっており、商店街の活性化にも貢献しています。商店街からも積極的な協力を受け、特に女性連によるみかんやお茶のおもてなしは好評です。

文化系の大会でありながら商店街という開かれた場所での開催は、参加する高校生に興奮を与えるとともに、市民や観光客にとっても俳句の街を体感できるものとなっています。

歴代最優秀句レリーフ

また平成20年からは、商店街に歴代の全国大会個人最優秀句のレリーフを設置しています。こうした歴史が積み重なって、いつしか大街道商店街は俳句甲子園の聖地と呼ばれるようになり、俳句甲子園全国大会出場を目指すという意味で「大街道を目指す」という言葉が使われるようになっています。

6．路面電車にも

大会は多くの関係者に支えられており、趣旨に賛同する企業からも支援を受けています。中には、市内を

俳句甲子園ラッピング電車

走る路面電車に「俳句甲子園」のラッピング広告を施す企業もあり、年間を通したＰＲとなるなど地域との連携が図られています。

7．人材の好循環

交流を目的とした大会の成果として、大会に選手として参加した高校生が、大学生や社会人になってからも OBOG として大会を支えてくれるという循環が生まれています。全国各地で開催する地方大会では、各地

大会を支える OBOG

域の OBOG が運営を支えています。松山市で行われる全国大会でも、毎年50名を超える OBOG がボランティアで駆けつけ、試合進行の要として活躍しています。彼らなくしては試合ができないと言っても過言ではありません。

8．大会の拡大に向けて

平成13年の第4回大会から、子規没後100年記念として松山市が共催に加わりました。松山市は俳句甲子園を、街の魅力を全国へ発信できる事業として支援しています。大会拡大のために平成22年から、高校生を対象にした俳句甲子園出張講座を開催しています。OBOG を講師として派遣し、俳句の基礎から模擬俳句甲子園の体験まで、講義を聞くだけではなく、参加者がお互いの俳句を読み、ことばを交わす参加型の講座です。平成28年9月末までに開催回数53回、参加校数297校、参加者数1,535人を数えます。実施した地域では、大会新規参加校、大会継続参加校の増加につながっています。

9．まちの魅力を創出

松山市は平成26年、俳句甲子園が俳句の音数と同じ 17 回を迎えた記念として開催したシンポジウムで、「俳都松山宣言」を発表しました。これは松山市が、俳句を愛するまちとしての誇りを胸に、俳句甲子園をはじめとして俳句文化の裾野を広げる活動を続けることを宣言したものです。

その後松山市では、松山を拠点に

俳都松山大使の夏井いつきさん（右）

テレビなどで活躍する俳人の夏井いつきさんを俳都松山大使に任命し、全国各地でイベントを開催するなど俳都松山のＰＲを精力的に行っています。俳句甲子園を核として地域が大きく動くようになってきています。

10. 課題と展望

平成29年には第20回記念大会を迎えます。折しも平成29年は、正岡子規・夏目漱石の生誕150年でもあります。俳句甲子園が松山で生まれた根底にある子規・漱石の節目を飾る大会として企画を検討しているところです。

また大会は今後も更なる拡大を目指しています。平成27年には関西支部が設立され、全国へのネットワーク展開も始まりました。こうした中で、大会を100年続けることを目標として、じっくりと成長を進めていきたいと思います。